

その他

助教・助手看護学教員のFD支援のあり方
—実施2年目の助教・助手FD支援の評価からの検討—

The way of FD support of assistant professor/research associate nursing faculty
- Consideration from the evaluation of the second year of the FD support -

阿達瞳 太田裕子 崎山佳那子 須藤麻衣 川原理香
寺尾洋介 伊藤美千代 阿部桃子 宮本千津子

Hitomi ADACHI, Hiroko OTA, Kanako SAKIYAMA, Mai SUDO, Rika KAWAHARA,
Yosuke TERAU, Michiyo ITO, Momoko ABE, Chizuko MIYAMOTO



東京医療保健大学
TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

〈そ の 他〉

助教・助手看護学教員のFD支援のあり方 —実施2年目の助教・助手FD支援の評価からの検討—

The way of FD support of assistant professor/research associate nursing faculty
- Consideration from the evaluation of the second year of the FD support -

阿達瞳 太田裕子 崎山佳那子 須藤麻衣 川原理香 寺尾洋介
伊藤美千代 阿部桃子 宮本千津子

東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科

Hitomi ADACHI, Hiroko OTA, Kanako SAKIYAMA, Mai SUDO, Rika KAWAHARA, Yosuke TERAOKA
Michiyo ITO, Momoko ABE, Chizuko MIYAMOTO

Division of Nursing, Faculty of Healthcare, Tokyo Healthcare University

要 旨：本学看護学科FD委員会では、平成25年度より助教・助手看護学教員に対するFD支援の重要性に着目し、「助教・助手看護学教員の個々の自己研鑽を支援していく体制の整備」を目的に、新たに3つの支援を立ち上げるとともに、既存の支援の1つについては改善を試みた。これらの支援は2年間継続することで学科内に定着したと考えられ、その上で改めて支援の効果を評価すると共に、評価を通じて、今後の助教・助手看護学教員に対するFD支援のあり方について検討した。その結果、1)異なる立場の教員それぞれの支援ニーズを考慮する、2)サステナビリティを实践する、3)FD委員会の体制づくり、委員自身の成長を高める、4)組織全体で支援に取り組む、という示唆が得られた。

キーワード：助教・助手看護学教員、FD、支援、委員会活動

Keywords：assistant professor/research associate nursing faculty, FD, support, committee activity

I. はじめに

FD（ファカルティ・ディベロップメント）とは、「教員としてより良くなる事を助ける教育」を意味し、我が国においても1999年の大学および短期大学設置基準の改正に伴いFDの努力義務が課せられた。看護系大学組織全体においてもFDを効果的に推進することは重要な課題の一つと言える。

看護系大学教員は看護学を学んだ後、病院や地域等、医療現場での経験を積んだ者が直接入職することも少なくない。このことから看護学を教える際、特に「看護学実習」においては現場での経験が活かされる一方、教育方法や教育技術については着任して初めて学ぶ者も多い状況が推察される。また近年看護系大学の新設が増加している現状から、新任教員の増加、教員の教育経験の多様化が生じ「教員を育てる」ことの必要性が報告されてきている^{1,2)}。これらのことから、

看護学系大学の教員にとってFDの重要性は非常に高いと考えた。

本学のFD支援体制は、大学に設置されるFD委員会を主軸としつつ、各学科に学科教員が構成する学科FD委員会が設置され、教員が主体的にFD支援に参画している。看護学科FD委員会では、平成25年度より、助教・助手看護学教員（以下：助教・助手教員）に対するFD支援（以下：助教・助手FD支援）の重要性に着目し、「助教・助手教員の個々の自己研鑽を支援していく体制の整備」を目的に新たに3つの支援を立ち上げ、既存の支援の1つについては改善を試みた。その結果、前年度の支援の評価では助教・助手教員の背景やニーズ、看護学が多様な専門領域で構成されている特徴、領域によるFDの支援状況などの多様性を踏まえることが重要であるという示唆を得た³⁾。この評価を踏まえ、26年度は支援の方法を改善し、仕組みづくりの段階から学科への定着化を目指して支援を継続

した。2年間の支援の実施を経て、学科内での助教・助手FD支援は定着してきたことが伺える。しかし、支援が助教・助手教員のニーズを満たし、実際に貢献できたか、そして今後更に助教・助手FD支援を向上させるには、どのような取り組みが必要か、検討することは重要である。

II. 目的

本報告は、本学看護学科FD委員会による助教・助手FD支援の内容とその評価を報告することに加え、評価を通じて、次年度以降の具体的な支援課題だけでなく、助教・助手FD支援全体のあり方について検討する事を目的とする。

III. 結果：支援概要と評価

1. 平成26年度 助教・助手教員の概要

本学科は基礎看護学、機能看護学等から成る10領域で構成され、教員総数は49名、うち助教・助手教員17名（助教：8名、助手：9名）であった。この17名を対象に、支援を実施した。

2. 平成26年度助教・助手FD支援の概要

目的：助教・助手教員の個々の自己研鑽を支援していく体制の整備

1) 助教・助手教員のための学外FD活動支援費制度(以下、FD支援費)の活用促進

目的：助教・助手教員のFD活動を支える為、FD支援費の活用を促進する。

①教育能力の向上を図るため、研修等の参加(1年に1回以上)を促進する。

②研修等で得られた情報は広く共有し、看護学科全体の教育の質の向上を図る。

方法：①事前申告書の提出：助教・助手教員が学外FDに積極的に参加できている現状を、委員会が把握し学科内で共有するため、また助教・助手教員自身が研修計画を立て、研修への参加調整を円滑に行うため「事前申告書」を作成し、助教・助手教員全員からの提出を求めた。

②活用促進の広報：学科会議及びメールで、定期的に支援費活用を促した。

③申し合わせ事項の改訂：「FD支援費」を活用しやすくするため、申し合わせ事項の内容を整理した。

結果：17名中、支援費を活用したのは6名(35.3%)

であった。

2) 助教・助手教員の自己研鑽に役立つ推薦図書の情報提供

目的：助教・助手教員が自主的に自己研鑽を積めるための環境を整える。

方法：図書委員会及び図書館と協力し、学科教員に対しFDに関する図書等の推薦を募集した。得られた図書の情報は学科内で共有し、未所蔵の図書は購入した。

結果：13冊の推薦が得られ、そのうち12冊(1冊は所蔵)を新たに購入した。

平成25年度と合わせ、計28冊の図書(19冊購入、9冊所蔵)が自己研鑽に役立つ図書としてリストアップされ、学科内で共有された。

3) 研究成果の発表

目的：看護学科教員が取り組む研究の成果を共有し、研究活動の促進に繋げる。

方法：①成果発表：2か月間毎に学科教員の研究成果をポスター化し、掲示発表した。発表者は事前に領域、職位が偏らないよう依頼し、成果は過去のもの(前年度以前)も含んで良いこととした。掲示場所は前年度よりも目に留まりやすい場所に改善を試みた。

②狙いの説明強化：前年度は発表者・閲覧者それぞれの研究活動への刺激となるよう、閲覧者にコメントの記載を求めたが、本年度は任意とし、あくまで研究成果を閲覧することで自身の研究活動の意識づけに繋げる、という点を強調した説明を行った。

③広報活動：了承が得られた場合は学科で運営するfacebookに成果の発表状況を記事にして掲載し、助教・助手FD支援としてだけでなく、学科FD活動の広報も行った。

④活動評価：研究活動促進の意識づけに繋がったかどうかを、アンケートから評価した。

結果：研究成果は8領域より9テーマ発表され、学科内で共有された。

4) 人材バンク

目的：看護学科教員が学科内の教員の力を活用し合い、助教・助手教員の成長・発展を促す。

方法：①リストの作成と共有：学科教員の了解を得、講師以上の教員を対象に、助教・助手支援だけでなく学科教員の支援につながる自己の能力開示(教育活動・研究活動・大学運営・キャリア・その他のカテゴリ)を募集した。得られた情報はリスト化し、学科内で共有した。

②人材バンク活用の周知：人材バンクリストの活用については「取扱い要項」に基づき、必要時FD委員が調整に入るほかは自由に活用できることとして、学科内に周知した。

③活動評価：助教・助手教員の成長・発展に繋がったかどうかは、アンケートから評価を得た。

結果：13名の教員より登録申請が得られ、学科内で共有した。

3. 支援評価

1) 評価方法

- (1) 時期：平成27年3月
- (2) 対象：学科教員48名
- (3) 内容：アンケートを用い、助教・助手教員と講師以上の職位の教員で対象を分け、それぞれに対して各支援が助教・助手教員のFDに寄与したと思うか、また今後の助教・助手教員に役立つ支援（環境含む）について質問した。アンケート用紙は匿名であり、助教・助手FD支援活動の評価として学外へ発表するための資料とすることを明記し、回答をもって結果の公表への同意が得られたものとした。

2) 結果

(1) 概要

アンケートの全体の回答率は37名（77.1%）、助教・助手教員は15名中11名回答（73.3%）、講師以上の教員は33名中26名（78.8%）から回答が得られた。

(2) FDに関する支援費制度の活用促進

アンケートの「支援が支援費の活用に役立ったか、また活用しやすい環境であったか」については、半数以上の肯定的な評価が示された。その一方で、助教・助手教員からは「管理的な印象を受けた」、「より活用しやすい方法の検討の希望」といった回答が見られた（表1）。

(3) 助教・助手教員の自己研鑽に役立つ推薦図書の情報提供

集められた図書リストについて、助教・助手教員は回答者全員（11名、100%）が「見た」と回答した一方、実際の活用は2名（18.2%）であった。その理由としては、「図書館の配架場所を知らな

った」、「もともとある図書から読んでいる」、「自分に合った図書を購入した」、「図書は選定しているが、まだ読めていない」といった回答が見られた。講師以上の教員は、図書購入が助教・助手教員の自己研鑽に半数13名（50%）が「役立った」、半数が「どちらとも言えない」と回答した。その理由として「情報が提供されることで、研鑽に踏み出しやすい」、「一から調べなくて済む」、「知らなかった本について知ることが出来る」といった回答が見られた。

(4) 研究成果発表

研究成果発表について、助教・助手教員は全員（11名、100%）、講師以上の教員も大多数（25名、96.2%）が発表を見たと言った。しかし発表が助教・助手教員にとって研究活動に取り組むきっかけ作りとなったかについては評価が分かれた（表2）。

【役立った】

「他の教員の研究成果を目にし、示唆を得ると共に自分も頑張ろうと刺激を受けた」、「目につきやすい場所に掲示され、刺激になったと思う」、「成果を身近にみる事で、学びを得る事が出来た」、「他の教員の研究を知り、刺激を受けた」、「モチベーションの向上に役立った」、「自分の研究成果を発表する機会は重要」

【役立たなかった】

「すでに研究活動に取り組んでいる為、きっかけ作りにはあまり刺激を受けなかった」、「研究のプロセスの方を共有できた方が有意味」

【どちらとも言えない】

「目にする事で研究に対する意欲にはつながったが、実際に取り組むまでには至らなかった」、「動機づけの一助となっているか、コメントも少なく判断が難しい」

(5) 人材バンク

公開した人材バンクリストについて、助教・助手教員10名（90.9%）、講師以上の教員21名（80.8%）が閲覧していた。実際の利用については、助教・助手教員は3名（27.3%）が「利用した」と回答した。活用した教員からは「バンクとしての利用ではなかったが、先生方との会話の中で刺激を受け

表1 FD支援費に対する評価

	助教・助手教員	講師以上の教員
活用し役立った	7名(63.6%)	19名(73.1%)
活用しやすい環境だった	6名(78.8%)	21名(80.1%)

表2 研究成果発表に対する評価

	助教・助手教員	講師以上の教員
役立った	5名(45.5%)	16名(61.5%)
役立たなかった	1名(9.1%)	2名(7.7%)
どちらとも言えない	5名(45.5%)	8名(30.8%)

た」、「バンクに登録されている先生に相談でき、役立った」、反対に活用しなかった教員からは、「機会が無かった」、「具体的な活用方法が分からなかった」との意見に加え、提案として「年に何回かは助教・助手教員が集まれる機会を作っても良いのでは」、「リストの配信時期を早めても良いのでは」との意見が見られた。一方、情報提供側の講師以上の教員は依頼があったのは0人と回答していた。

(6) 今後の助教・助手FD支援

今後の助教・助手教員の自己研鑽に役立つ支援について自由記載で回答を求めた(表3. 4)。

表3 今後の助教・助手教員の自己研鑽に役立つ支援
(回答: 助教・助手教員)

他領域教員と共同研究できる仕組み
研究時間の最低限の保障
講師以上の教員のキャリア形成に対する関心を促す支援・環境
他領域の講師以上の教員とのディスカッションの機会
助教・助手教員の主体性を支えるFD委員会体制
現在の支援の継続
職場に求められている教育者になるための活動

表4 今後の助教・助手教員の自己研鑽に役立つ支援
(回答: 講師以上の教員)

研究力を向上できる 環境整備	研究時間の確保
	研究時間と指導者の確保
	専門性に立脚した研究活動への指導
	助教・助手教員の研究への承認
講師以上の教員の 助言と指導	助教・助手教員がキャリアビジョンを描くための助言
	共に取り組むことによる動機づけ
	自己研鑽方法の共有
多様な研修の機会	フィールド研修の仕組みづくり
	学外研修の機会の増進
	文献購読の機会
教育力を向上できる 環境整備	助教・助手教員への役割付与
	自己研鑽の意欲が高まる環境

IV. 考察

1. 実施した助教・助手FD支援における今後の課題

1) FD支援費

亀岡⁴⁾は、FD運営に携わる看護学教員が直面している活動上の問題に、「予算欠如・不十分によるFDプログラムの不十分さ」、「組織的・計画的・継続的・効率的なFD推進不十分」を挙げている。FD支援費は助教・助手教員が自己研鑽を積むための経済的な負担の軽減を狙い、本学が組織的に支援を行っているため、「経済的支援の不足」という問題の深刻度はFD委員会にとっても、助教・助手教員にとっても低いと考えられた。しかし、実際の活用状況からは、活用しやすさだけの問題でなく、支援費の必要性自体の認識が教員個々によって異なる可能性

が示唆された。支援費を活用しやすい環境づくりにについては、本年度申し合わせ事項を改訂したことに加え、支援費制度の意図に不一致が生じない周知活動の継続が、次年度の改善につながっていくと考えられた。

2) 推薦図書の情報提供

教育経験の少ない助教・助手教員にとって、自身のFDに関する課題を見出し、研鑽を積むための糸口を模索するには、手元に十分な資源が揃っていることは重要と考えられ¹⁾、その一つとして、学内に書籍等の資源を増やすことは、経済的・時間拘束等の負担を軽減することにつながると考えられる。アンケート結果からも、実際活用できる環境が整う事で負担軽減になるといった前向きな評価が得られており、支援の方針が助教・助手教員だけでなく講師以上の教員のニーズをも満たしたと考える。反面、実際の活用状況が低かった点においては、「いつでも調べられる」環境が整ったことが、逆に積極的な活用に繋がりにくくなった可能性が考えられた。

3) 研究成果の発表

研究成果発表に関するアンケート結果からは、「それぞれの専門分野で活動する教員個々の取り組みを知り、刺激を受けた」との結果が示された。日本看護系大学協議会⁵⁾では、助教以上で経験の浅い教員に必要とされる能力として「教育・実践・研究の連関へ学究的に参与する力」を挙げている。今回の取り組みはその意識づけの一助となったと考えられた。また石田¹⁾は、新任教員に対するFD支援に「教員間の交流を促す支援」が必要であると述べている。本学では夏季・春季の2回、学科全教員を対象とした研修を実施しており、その際には領域・職位を超えた交流が図られている。本支援も研究成果を通じた他交流の場となることが期待されるが、これまでは支援の定着化のため領域別・担当制での発表としていたため、今後は助教・助手教員を含めた学科教員間での交流と切磋琢磨が円滑化されるよう、主体的に自身の研究成果を発表していく方法の検討により、支援の効果が更に期待できると考えた。

4) 人材バンク

助教・助手教員が学科内の教員個々が持つ能力を活用し支援を得ることは、「推薦図書支援」における物理的な資源だけでなく、人的資源も整えるという点で有意義であると考えられる。また、本学科の看護理念の1つに「現場での協働」が挙げられている。これは臨地実習における実習施設と学科との協働等の側面だけでなく、学科教員同士が協働して助教・助手教員の成長を支援すること、更には支援する側

にある教員の指導力強化としての意味も持つと捉えられ、「人材バンク」は学科組織全体のFDに繋がる支援となると考えられた。2年間を通して支援は浸透したと考えるが、その一方、実際のアンケート結果からは、リストの閲覧率は高かったものの、実際の活用数は少なく、また助教・助手教員は「活用した」認識がある反面、講師以上の教員は「活用はなかった」と捉えており認識の相違が見られた。しかしながら、昨年度はFD委員会企画での活用のみであったことに比べ、本年度は個人的活用が見受けられた事、また助教・助手教員を参加対象とした自主的な学習会が催されていた事から、助教・助手教員は既に自主的に領域内ないし他領域の教員に支援を求めることが出来ている状況が考えられた。領域・職位間の隔たりが少なく「開かれた学科組織」が形成されている環境であれば、FD支援として枠組みを作らずとも、組織内の人的資源は有効に活用される、という可能性が見出された。

2. 助教・助手FD支援のあり方

1) 異なる立場の教員それぞれの支援ニーズへの考慮

アンケートの助教・助手教員に役立つ支援について、助教・助手教員(表3)と講師以上の教員(表4)の回答結果を比較すると、研究に関する支援、講師以上の教員との交流、教育力の向上といった、共通した支援ニーズを双方が持っていることが伺えた。また講師以上の教員の回答内容は助教・助手教員よりも具体的であった。彼らは自身の助教・助手教員時代の経験を踏まえ、成長に役立つ支援とは何かを明確に捉えることが出来ていると考えられた。須藤ら³⁾は、助教・助手教員個々の状況や段階に応じて生じる多様なニーズを捉えたFD支援の必要性を述べている。これらのことから、助教・助手FD支援のニーズを把握する際には、当事者からのニーズのみに着目するのではなく、講師以上の教員の考えもくみ取ることで、助教・助手教員の成長の実現に、より効果的・効率的な支援を展開することが出来ると考えられた。一方、職位等様々な立場の違いにより、助教・助手FD支援に対する認識の有無や程度が、支援全体への協力度に影響する可能性も示唆された。

2) サステナビリティの実践

今回のアンケート結果の内、今後の助教・助手FD支援に対して「現在の支援の継続」という意見が示された。支援の定着化を狙って2年間の助教・助手FD支援を遂行したことと、この評価からは、助教・助手FD支援における「サステナビリティの実践」

という観点が見出された。サステナビリティとは、本学学科方針の1つであり「持続可能性」を指す。助教・助手FD支援の内容をすぐに刷新するのではなく、継続する中で対象のニーズに近づけていくこと、又、形骸的な遂行ではなく、定期的に効果を評価し、支援をブラッシュアップさせていく事が重要と考えられた。

3) FD委員会の体制づくりと委員自身の成長の促進

今回のアンケート結果のうち、「助教・助手教員の主体性を支える委員会体制」が今後の助教・助手FD支援に必要なとの意見が示された。このことから、助教・助手FD支援にはFD委員会の支援体制や、委員の能力についても検討が必要と考えられた。亀岡ら⁴⁾は、FD活動上に携わる教員の13の問題の一つとして「知識不足によるFD委員としての役割遂行困難」を述べている。助教・助手教員のニーズをどのように理解して一看護学教員としての成長を促すか、FDの原点に立ち返り、委員会としてどのような体制で支援していくか、そして委員自身もFDに関する知識を深め、支援に臨む事が重要、との示唆が得られた。

また、日本看護系大学協議会によるFDガイドライン⁵⁾や、石川の報告¹⁾からは、「実習に関する教育力」について支援の必要性が明示されているが、今回のアンケート結果からはその点は表れなかった。

実習は看護学教員の教授活動の中心でもあり、助教・助手教員のFDには重要な項目の1つと言える。このことから、助教・助手FD支援は助教・助手教員にその時顕在化しているニーズだけでなく、幅広い視野でニーズをくみ取り、必要な支援に繋げる委員としての力が求められると考えられた。

4) 組織全体での取り組み

今回、助教・助手FD支援に対して助教・助手教員だけでなく、講師以上の教員にもアンケートを実施したことで、多様な評価を得る事が出来た。アンケートは単に支援を評価するだけでなく、学科全体で助教・助手FD支援について考える機会となったと考える。学科全体でFDを考えることに関して、日本看護系大学協議会が作成した「助教・助手看護学教員のためのFDガイドライン」⁵⁾は、助教以上の職位で経験の少ない教員の教育力向上を目標に管理者向けに作成されたものである。また、石川¹⁾は新人教員が抱えやすい困難を軽減させる支援として、「教育技術の補充」等6つの視点を示し、個々の状況に応じて推進が有効であると述べている。これらのことから、助教・助手FD支援には委員会内だけでなく、組織全体で助教・助手教員に求められている

課題や問題を理解・共有し、支援を考えることが有効であると考えられた。まず、社会的に明らかにされている課題を把握し、その上で各組織に求められている役割や課題を共有することで、助教・助手FD支援のプロセスを、具体的かつ明確にすることが出来る。それにより、助教・助手教員が実際に活動する際も、自身の課題を明確に捉え、周囲の協力を得ながら積極的に取り組めることが期待できる。

V. 結論

継続支援として本年度実施した助教・助手FD支援に対する評価を通じて、助教・助手FD支援のあり方を検討した。その結果、

- 1) 異なる立場の教員それぞれの支援ニーズを考慮する
- 2) サステナビリティを実践する
- 3) FD委員会の体制づくり、委員自身の成長を高める
- 4) 組織全体で支援に取り組む

という示唆が得られた。

【引用・参考文献】

- 1) 石田佳代子. 看護系大学の新人教員に対するファカルティ・ディベロップメント (FD) 推進のための文献調査に基づく課題. 看護科学研究 2010 ; 9 : 10-18.
- 2) 松浦江美, 竹松加奈, 鶴田早苗. 新設学部における看護教員の教育ニーズの現状と課題. 活水論文集 看護学分編 2013 ; 1 : 23-31.
- 3) 須藤麻衣, 阿達瞳, 竹内博美 他. 助教・助手看護学教員のFDに関する多様な支援の実態—平成25年度 看護学科FD委員会活動 (一部) から— 東京医療保健大学紀要 2014 ; 9 : 31-35.
- 4) 亀岡智美, 舟島なをみ, 野本百合子, 村上みち子, 鈴木美和. FD企画運営に携わる看護学教員が直面している活動上の課題. 日本看護研究学会誌 2008 ; 31 : 57-62.
- 5) 一般社団法人日本看護系大学協議会 看護学教育質向上委員会 平成23年度活動報告書
<http://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2012/07/H23-FD-forHP.pdf> (2012.3.31)